



外国人児童生徒等教育を「ライフコース」から考える

包摂は、その後の人生まで 届いているか



結 城 恵(群馬大学)



本資料の利用について
教育・研修を目的とした利用に限ります。資料としてご利用を希望する場合は、
コンテンツの出典として「利用する資料等の作成者・執筆者」「利用する資料等が作成・公開された事業名」「コンテンツが示されているウェブサイトのURL」を明記して利用してください。
部分的な切り取りや加工をして利用することは禁じます。

無断転用・複製はご遠慮ください

なぜ今、この問いか



包摂は制度・学校内では前進



しかし「その後」は語られていない



移行期の断絶が可視化されにくい

本日の立ち位置

 理論整理でも現場報告でもない

 子どもの移行と接続に注目

 包摂をプロセスとして捉える

包摂が成立した「あと」

支援がリセット



義務教育修了・転校・進路分岐点で
支援が一度リセットされる事例

! 継続的なサポートが途切れる瞬間

学齡・制度の狭間

制度の壁



学齡超過



特別ルート



入学困難

学齡超過・特別な教育経路
通常ルートに乗れない進路の例



既存の枠組みからこぼれ落ちる現実

数字で見る断絶

日本語指導が必要な
生徒の高校中退率は
日本人生徒と比較して

高校中退率

約8倍

深刻な教育格差の実態



データ出典

文部科学省等の調査データを基に算出

見えない子どもたち

 Invisible Children



就学



不就学



状況不明



就学

不就学・就学状況不明の存在
支援が届かない構造



制度の網からこぼれ落ちる子どもたち



子どもの側から見ると

当事者の声

“

「次に何をすればよいか
分からない」

”



努力が報われない経験



包摂をライフコースで考える



線（プロセス）

点ではなく**線**で捉える

包摂は一過性のものではない



在学中だけでは不十分



教育版フレーム



定住



統合



定着



学校にできること／できないこと



できないこと

学校だけでは
支えきれない



できること

しかし
最初の接続点

必要なのは伴走



伴走型支援



学校・地域・外部機関の連携
担当をリレーする仕組み



子どもを中心とした途切れない支援ネットワーク

問い①

?

包摂はいつ成功したと
言えるのか



支援のゴールを再定義する

問い②

?

**教育の責任範囲は
どこまでか**

結び

まとめ



包摂は場ではなくプロセス

子どもが次の場所に立てているか



継続的なまなざしを

